

第十五章 幹線水路の完工、通水式

1 牧尾ダム、用水の幹線工事完工

吉田茂元総理、現地を訪問

水源牧尾ダムは、ロックヒル方式で畔柳嘉男、瀬戸忠武が工区長となり、世銀派遣の技術者の援助を得て西松建設が請負って、昭和三十六年二月十八日、完工式を挙げる事ができ、幹線水路補助溜池については、

第一工区、兼山取入口―愛岐トンネル出口までは佐野鑑尔が工区長となり間組が請負って、主としてトンネル、サイフォンの連続で工事が進み、

第二工区は、愛岐トンネル出口から高蔵寺サイフォン出口までを松竹兼義が工区長となり佐藤建設が請負い、予定のごとく工事ができ、

第三工区は、高蔵寺サイフォン出口から日進、東郷、境の海老池までを工区長日比野文雄が担当、予定のごとく工事が進み、

第四工区は、星野義一が担当、東郷池を除いて、その下流から八幡サイフォンまで、第五工区は、八幡サイフォン以下内福寺のポンプ場までを小島盈が工区長となり、着々と



吉田茂元首相が初めて愛知用水の現地を訪問。久野さんが出迎え、固い握手。中央は伊藤佐

工事が進み、

第六工区は、補助溜池一〇個ということ、まず三好池を着工、昭和三十四年二月二十日には工事が完了したが、東郷池の出現によって、三好、松野池のみで工事中止となり、東郷池は用地買収に難航したが、第一工区の工事が完了した佐野鑑爾が所長となり、三十六年十二月十七日に完工することができた。

当日には吉田前総理が長女の麻生和子さんを伴って初めて愛知用水の現場に來られた。麻

生さんが久野さんに、

「いよいよできましたね。おめでとう」

と言われ、久野さんは、

「吉田先生のおかげで用水はできたが、これから負担金を払っていかねばなりませんので喜んでばかりおれません」

と言うと、和子さんは、

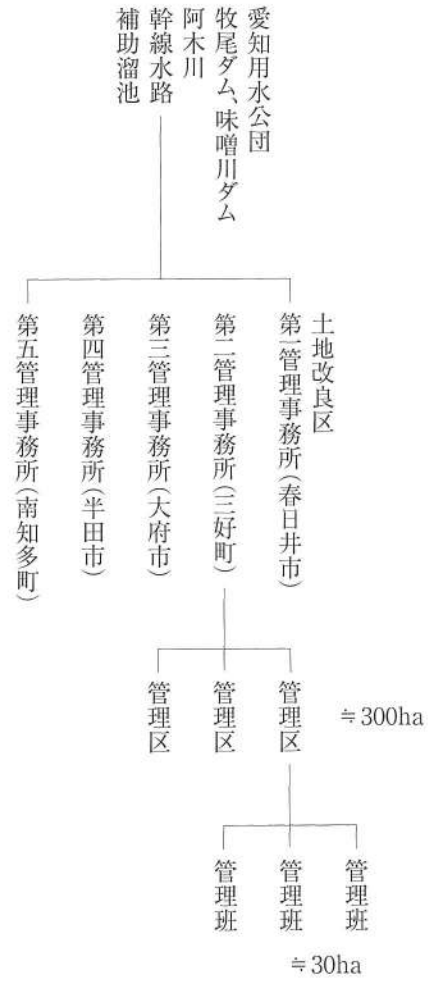
「負担金は何とかなるわね、じいちゃん」

と言われ、吉田さんは苦笑いしながら、「うん、うん」とうなずいておられたのが、印象的であった。

支線工事の五〇〇町歩以上を支配する支線については、公団が幹線工事と同時に施行し、五〇〇町歩以下については、公団が岐阜県、愛知県に委託し、末端五町歩まで施行し、末端五町歩以下は前述のように公団が関係土地改良区に耕地整備事業を委託して、全線、兼山取水口で取水を始めた時に末端圃場に水が必要量（水田は減水深、畑はイン

ティグレートで調査した量)が行き渡り輪灌漑のできるように計画した。水の必要量が土壌の種類(砂土、壤土、硬質壤土など)によって異なるが、おおむね田の減水深は日、一〇ミリ前後。畑のインティグレートは、日、五ミリ前後で地区ごとに調査ができています。

〔愛知用水土地改良区維持管理組織〕



工業用水は、公団から県が水を買って、配水池で浄水し各工場に売り渡す。上水道用水は県が公団から買って浄水し市町村に売り渡す。市町村はそれぞれ必要個所に送水池を設け、各戸に売り渡すシステムになっている。

中日文化賞を受賞、朝日賞は辞退

その間、久野庄太郎さんと浜島辰雄は昭和三十六年五月三日、中部日本新聞社より中日文化賞を受賞した。その後、朝日新聞からも朝日賞の話があったが、久野庄太郎さんは、私達は表彰されるために愛知用水をやったのではない。表彰屋になってしまったのは世の中に申しわけないと、辞退することにした。そのかわりに黒部ダムが朝日賞を受賞した。よいことである。

さらによいことは、あれだけの大工事に対して、汚職の声を聞かなかったことは、吉田総理以下、当時の政治家・担当国、県、市町村当局の役所が国の復興に真剣であり、地元も金がなく、多くの人々の私財を投げ出しての事業推進であったからだと思う。これだけは本当に誇りに思えることである。

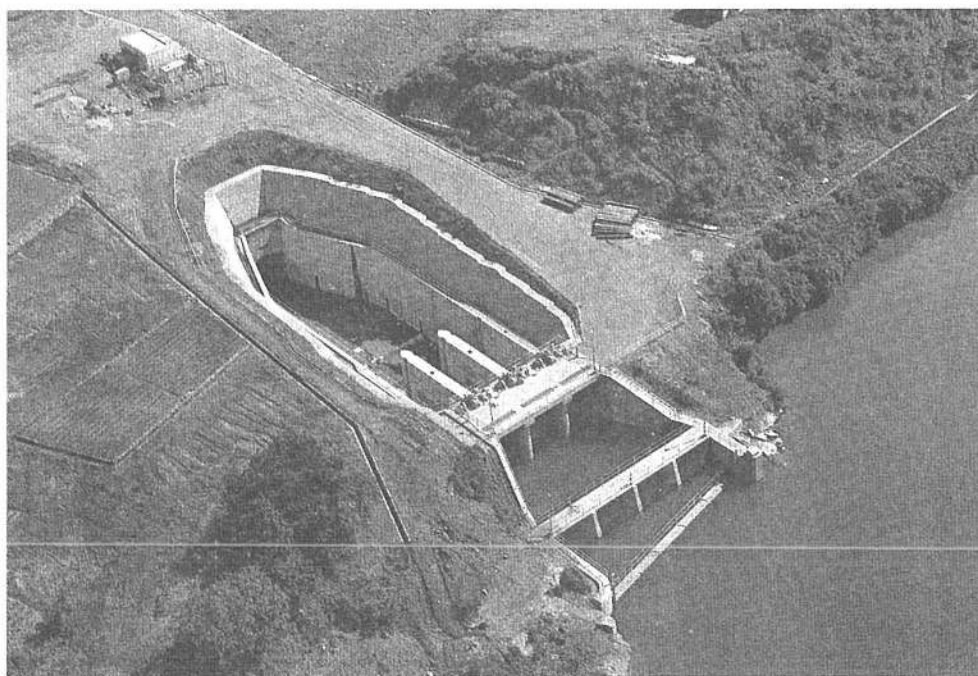
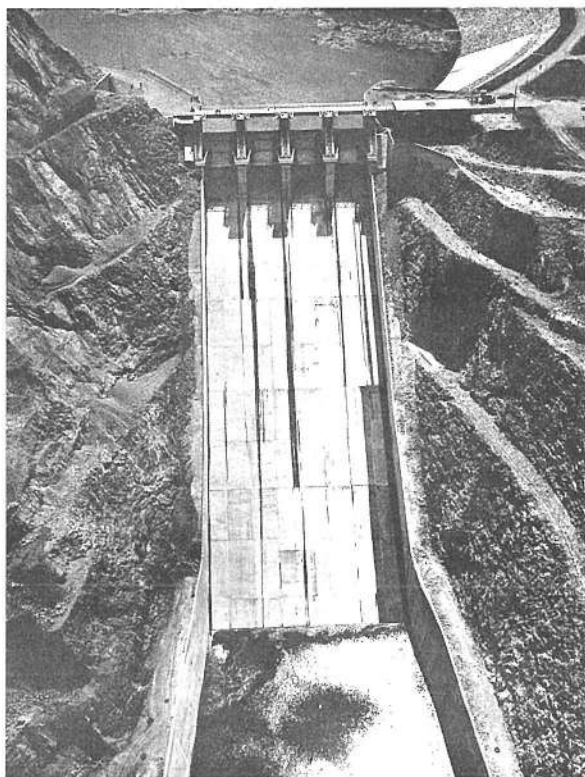
また、愛知用水公団の労組委員長に頼まれた、公団職員の行き先を、衣替えした愛知用水公団（後水資源公団に吸収）にすることとなり、多くの人材を収容し、豊川用水が愛知用水に勝るとも劣ることのない開発ができて、愛知県に二つの世界に誇る地域のできたことは、久野庄太郎が機を失せず吉田元総理にお願いし池田総理にひきつがれてできたことであり、偉大なる功績であったといえよう。

2 兼山取水口での通水式

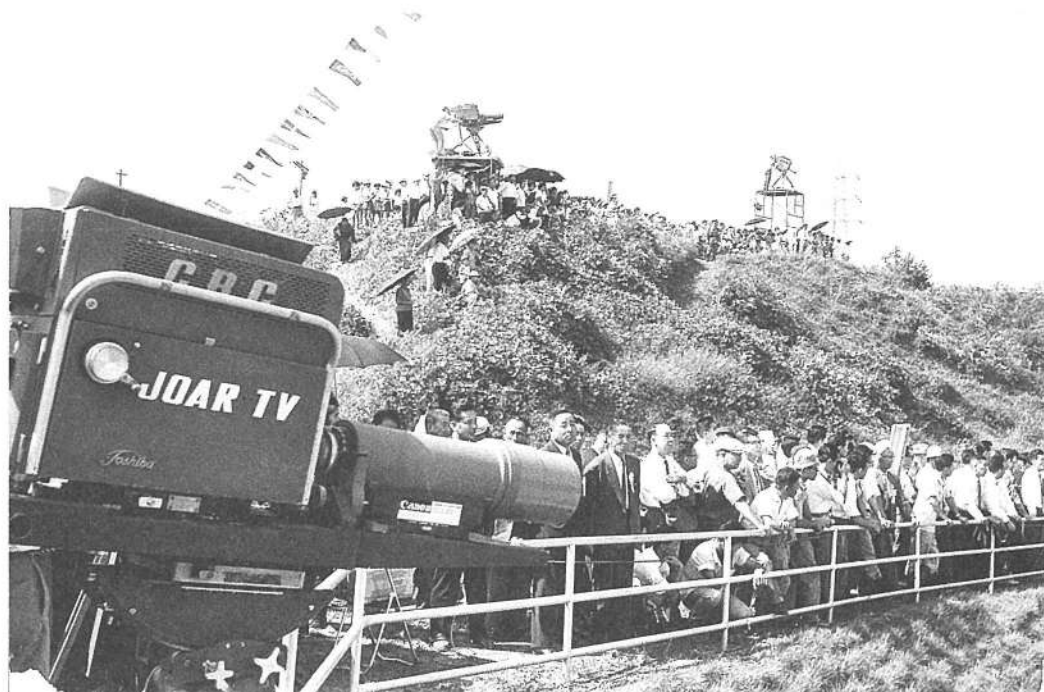
感激の涙とは別に：

以上のように、昭和三十三年、三十四年、三十五年にわたったさしもの大事業も公団、県、土地改良区が一体となって事業をすすめ、予定の事業のほとんどが終了した。

牧尾ダムの余水吐



兼山取水口完成



兼山取水口での通水式風景。カメラのレンズの先に久野さんと、浜島の顔が見える



くす玉が割られると同時に木曾川本流の水毎秒30m³が取水口から踊りこんできた



「やあ、水がきた、水がきた」と橋上から川面を眺める人びと
(大府支線分水点にて)

とくに最初の事業計画になかった、東郷池（のち愛知池）の事業も、用地買収には公団、県、土地改良区、地元町の努力によってほとんど完成した。

その間、昭和三十四年九月二十六日には伊勢湾台風の来襲があり、愛知用水事業の推進に支障を来すのではないかという疑念も生じたが、被害地域がややそれていたのと、地元受益者の熱意により、よく克服して本事業を進めることができた。

昭和三十六年二月二十八日には牧尾ダムの完工、続いて十月一日、全線の通水式を兼山取水口で行うことができたことは感激のきわみであった。

当日、久野さんは私とともに兼山取水口での通水式に参加した。そして、浜口公団総裁の手によって、くす玉が割られると同時に木曾川本流の兼山ダムの水毎秒三〇立方メートルが愛知用水取水口から幹線に向かって踊り込んで行くさまを見て、遠い先祖からの願いがここになえられ、感激のあまり、涙とともに手を握りあつて、「これからが私たちの正念場だ」と誓い合つたことは忘れることができない。

それと同時に、この水によって利益を生み出し負担金を完納するまでの努力が、ずつしりと肩にかかつてきたことを考え、喜んでばかりいられなかった。

そのために、堀の内の三反歩の土地に、三重大学の藤村次郎教授の指導を受けて稲の密植栽培を試みて、まずまずの結果を得たり、早植え水田の裏作てんさいに甜菜の栽培の試験を自身も試

み、また安城市の農業試験場宮崎技師、大府の灌漑試験地で氏原場長に依頼して栽培試験をしてもらったりして、新しい営農への進展を試みて努力を重ね、甜菜は早植え稲の裏作物としては非常に有利な作物であることを確かめた。とくにその茎葉屑が乳牛の飼料として利用できることは、酪農との組み合わせによる農業経営が可能となり、一層の希望が持てることになった。

同志とかわす祝盃は腸に沁みわたる

昭和三十六年五月三日、中日新聞社より愛知用水の事業の提唱と推進により中日文化賞をいただいたが、時期尚早ではなかったか？ 農家とともに負担金の完済し終えてこそ完成ではないか。また、その年朝日新聞から朝日賞の話があったが、前述の心境を話してご遠慮申し上げたが、それが本当ではないか。

昭和三十六年十一月三十日、愛知県主催で祝賀パーティが愛知県文化講堂で催されたが、知多農村同志会においては同日の午後、最初に開発祈願をした武豊町堀田稻荷に集まって、心からなる祝盃を挙げた。農村同志会においても、昭和二十三年十月一日、武豊の堀田稻荷で第一回の決起大会を開いて以来十有余年、それぞれの地元において、また、東京陳情など思い出は深く、その日の酒は腸に沁みわたり、これからの用水利用管理への思い思いの抱負を語り合い、心からの会となった。

3 豊明村大脇地区の大規模圃場整備計画

一、国道一号線のバイパス計画の実施（昭和三十六年頃）

建設省、中部地方建設局においては、四日市―桑名―名古屋港に至る名四国道を建設し、国道一号線のバイパスとし利用してきたが、近年、その交通量が急激に増加して国道一号線の渋滞が甚だしいので、名古屋港をまたぎ天白川の下流から大高町を通り、共和、有松から豊明町の大脇南を抜け、境川付近で一号線と合するバイパス計画を立案した。

二、そこで必要用地買収としての豊明村大脇付近の優良農地約一キロが買収の困難となるを予想され、愛知県道路課の木村補佐より浜島に相談があった。道路は大脇の農地の中央を幅五〇メートルで切るので、地元としては、大変な問題である。

三、私は今は大府在住であるが、大脇の生まれ、生家も農業で、兄と従兄の浜島鈴市が篤農家であったし、このあたりは親戚知己ばかり。そこで私は鈴市に事のあらましを話し、中部地建の小栗道路部長、木村鎮雄を伴って説明をし、この際、大脇地区としては近年農林省のすすめている「大規模圃場整備」地区の指定を受けて、農業を近代化する絶好の機会であることを説明。道路用地は減歩で出し、用地買収費は建設工事にまわして土地を売りたい人は坪六千円で用地外でも売ることができるようにした結果、減歩が一割ちよつとですませた。

四、県の補助金、道路用地の買収金の残り等があり、むしろ工事終了後に金が余り、農業機械の購入などの費用にまわすことができた。

四、とくに、地区内に墓場が大小六カ所あったが、これをまとめて、お寺の横の中電の線下に集めた。最初は「先祖の骨があるから」と言って反対した人もあったが、昭和四十年の夏、七夕の日に総移転を行った。

最初は、墓石や先祖の骨だと目を皿のように探して、リヤカーで運んでいた。昼食の時に寺の登龍方丈が出てきて、「人間死ねば土に返る。ひと握りの土を持ってくれば供養は勤まる」という話をしている所へ、久野庄太郎さんが冷酒三本持って来て、まわし飲みしているうちに、皆が「そうだ、そうだ」ということになり、夕方までにすっかり移転作業が終わり、区画の入った新しい墓地に移転して、もう水のつく穴田の墓や、藪の中の墓でなくなつて、よかつた、よかつたと喜ばれた。

① 農業の省力化

農業近代化の最重要課題は、農業の省力化であるが、土地改良をして大型機械のトラクターやコンバインを使い、共同作業場で調整・袋詰めになれば、今までの労力の十分の一で作業が終わる。これを他の園芸や家畜の飼料にまわせれば農家の経済も安定するし、重労働からも解放されて家計も安定する。

その後、この圃場整備事業は農林省の進めた農村モデル事業のモデルとして研究的に開発されて、全国のモデルとなった。とくに集落内の開発のあり方について研究材料を提供した。引き続き、阿野地区約一八〇ヘクタールの圃場整備の設計施行、施行管理事業の実施につながり、さらに沓掛地区大規模圃場整備事業を実施した。

② 常滑市の総合パイロット事業計画

常滑地区は、旧三和村、鬼崎村、大野町、多屋村、旧常滑町、西浦村、小鈴ヶ村が互いに関連なく農地を持って、水不足の谷田やちだの水田経営をやっていた。これを用水（愛知用水）道路、農業協同組合もバラバラであったものを総合的に一つにまとめ、また、集落から畜産を郊外に出し畜産団地にまとめ、道路・水路を統合して一体的な農業整備を実施した全国でもモデル的な農村総合計画を実施した。

③全村圃場整備の実施

愛知用水の通水によって全村一体的な圃場整備計画を立案実施した市町村、
・三好町

最初は一〇アール区画の整備から始まって全村を三〇アール計画の圃場整備を実施して、余剰地にトヨタ自動車の下請け工場を導入し、一体的な圃場整備を実施した。

その後、全町全村の圃場整備を実施した市町村は次の通りである。

・阿久比町、東浦町、東海市、知多市、日進市など

これで東尾張、三河北部、知多半島にかけての用水事情が一変した。余剰地に自動車関連の工場を誘致し、地域の余剰人口を吸収して生産力を高めて二十年を出ずして愛知県の工業生産力は全国三三四兆円の一〇%超の三八兆円に達した。

これは愛知用水地区のみならず、全県的、全国的に池田内閣のとった所得倍増計画、農業基本法に基づく、農業と工業を一体化した地域開発の結果で、日本が第二次世界大戦に壊滅的経済破滅を受け、これを復興した戦後政策が当を得た成果であったと断言してよいと思う。

また、前項に述べた愛知用水負担金を返済期間二十年にして完納できたことも、この経済政策に乗って進められたことにあるといえると思う。

つまり、

愛知用水着工・昭和三十年、愛知用水工事完了・昭和三十六年Ⅱ七年間

工事負担金据置期間・五年 昭和三十七年から昭和四十一年Ⅱ五年間

愛知用水負担金返済開始・昭和四十二年開始・昭和六十二年完納Ⅱ二十年間

4 耕地整備事業の実施

牧尾ダム、幹線水路は愛知用水公団が直轄事業として着々と実施し、支線水路の建設は愛知県が愛知用水課を新設して、公団は全国各県から技術者の応援を得て遅滞なく実施され、それからの末端五町歩以下の灌漑システムは昭和三十四年、五年の二万年に次のように土地改良区が県、公団の援助を得ながら実施された。

仕事の内容は用地は減歩によるため、案外協力的に進められ、希望も伴って農家の協力も大きく、予定通り進めることができ、やりがいのある仕事であった。ただ技術者の大部分が新卒であって、技術的にも経験不足で、試行錯誤が多く、経験者の指導が大変であった。

同時に水田の区画整理なども伴い、仕事が複雑であったが、よく三年間の間に所定の地区を灌漑できる整備ができたことは、農家の協力があったことが何ものにもかえがたいものであった。

その内容は巻末の「資料編」のように、関連受益市町村全体に及んだ。

5 伊勢湾台風と愛知臨海工業コンビナートの形成

昭和三十四年九月二十六日来襲した伊勢湾台風は、台風の強さ、上陸コース、高潮などの関係が最悪で、木曾川、天白川の流域に甚大な浸水被害を起こし、浸水被害は千年前の状態に還ったといわれている。愛知用水事業は幸いなことに、基本的な施設は完成に近く、そこで停滞するという心配はなくなっていた。

臨海工業地帯の建設は、漁業権の交渉、諸条件の調査の途中にあり、今後の成り行きを心配していたが、農家も干拓地の被害、その他に呆然としている時で、漁業権が買収されて金が入る話でプラス方向に作用したかと思う。

その年の暮れに自社の進出工場の現地調査に来た出光佐三社長が名古屋港から横須賀港にハッチで上陸した時、出迎えの横須賀町長白羽清一、知多町の幹部連中に初対面の挨拶で、「ここは神風が吹いたそうで」と言った。その時は「何という無神経なことを言う社長か」と内心怒りとともに驚いたが、事実はその通り海岸堤防、港湾施設などの被害がものすごく、その復旧のメドも立たず、その後、農漁民たちは漁業権を諦めて漁業補償の方がよいという考えに変わり、交渉なども急速に進んで、コンビナート建設事業そのものにはプラス方向に進んだ。どの地域も、伊勢湾台風により、海岸堤防は寸断され、収穫は皆無で、どこの家も浸水に半壊で、その時、漁業補償の金が入るということで、大部分の農家は賛成、漁業権の金は歓迎で、臨海工業の工事は急速に進んだ。

時を合わせるように、佐布里池の建設工業用水の供給計画も進み、日本の戦後を復興させ

た上野、横須賀、知多、旭町地先の臨海工業コンビナートも順調に進んだ。

佐布里池からの工業用水の送水管上を道路にする工事も進んだ。寺本の駅南の道路（地下送水管）は久野庄太郎さんの住居に直線であたり、久野庄太郎の家も屋敷も半分となり、地域の人も同情、納得した。背後地の開発にも協力的になり、愛知用水事業も、臨海コンビナート事業も急速に進んだ。